

一 昭和十九年二月一日、陸軍上等兵を拝命す

一 同年二月二十五日、独立歩兵百九十三大隊歩兵砲に編入観測教育終了、観測手として作戦参加

一 同年八月一日―十三日、幹第三号作戦参加

一 同年八月十四日―九月二日、十九夏山東作戦参加

一 同年十一月一日―十五日、十九秋山東作戦参加

一 昭和二十年五月、歩兵第五十八大隊に転属、山東省臨沂県沂州付近の警備、命令受領で作戦に参加

一 同年八月一日、陸軍兵長を拝命し兵精勳章を受

く

一 昭和二十一年三月二十五日、内地送還のため青島港出航

一 同年三月二十八日、佐世保港入港、善行証書付与

一 同年同日、下士官適任証受領、現役満期除隊

初年兵教育から中支で

埼玉原 大野政勝

昭和十九（一九四四）年一月二十日、東部第六部隊（衣第五十九師団要員として）へ入隊、同日付、第五十三旅団第四十三大隊第二中隊に編入。同年二月二十五日、編成改正により独立歩兵第一旅団第九十二大隊に転属、第四中隊に編入。同年六月、濟寧北方の汶上県（我が中隊の警備地区）付近の肅正討伐に参加。

同年八月一日、陸軍一等兵。同年七月、「十九夏山東作戦」の一環として旅団作戦に参加。同年十月、両下店において嵐兵団（本隊が河南作戦に参加中のため）の初年兵（滋賀県出身）教育の助手として従事。

昭和二十年一月一日、陸軍上等兵。同年一月、濟寧の中隊において、昭和十九年徴集（東京、千葉、山梨県出身）現役兵の初年兵教育の助手。同年四月、兗州の大隊本部において、三月二十日召集の補充兵（千葉

県の出身)の召集教育(これは軍作戦に基づき「二〇春山東作戦」に本隊の旅団が移駐作戦中のため)。同年七月一日、陸軍兵長。同年七月、現地召集の補充兵の教育を諸城において実施(現地の在留邦人で四十〜四十七歳くらいでこの中に濟寧の大和ホテルの主人もおり、ほとんど父親ぐらいの歳だったのでやりずらかった)。

同年九月、大隊本部人事室勤務。昭和二十一年一月二十日、武装解除のため南定を出発、濟南、黄台に於いて武器返納。同年三月一日帰還のため米海軍のLS T(上陸用舟艇母艦)に乗船、青島港出帆。同年三月三日、長野県佐世保(旧軍港)着、上陸。同年三月五日帰郷。

不寝番勤務中の自殺(濟寧)

私達は、昭和十八年徴集で「衣」部隊要員で、東京の東部第六部隊へ仮入隊、北支派遣のため一週間後の昭和十九年一月二十七日、軍装検査を済ませ品川駅から軍用列車にて九州の博多駅へ、そして船で釜山へと

向かった。冬の玄界灘は波が荒く船酔いする者が多かった。上陸し休む間もなく釜山駅から大陸を走る広軌条の鉄道で朝鮮半島を縦断、鴨緑江を渡り満州を通過、津浦線にて濟南から南方約二百キロ地点にある兗州の町へ着いた。内地を出発してから一週間の長旅だった。

この町は交通の要所で、「楓」部隊の本部(師団)のあった所で、兵舎も立派で設備も整っていた。軍の作戦計画により楓部隊(完全に編成された師団だった)が南方戦線に転進、派遣されたため、この地域を守備する部隊が急ぎょ編成され(私達は列車の中で行先変更になったようなものだった)、私達も「衣」要員から「幹」独立歩兵第一旅団第百九十二大隊第四中队に編入された。第四中队は兗州から西方三十キロにあり、鉄道も兗州から分岐し、その終点の駅濟寧の町に駐屯した。ここは山東省で一番の穀倉地帯で、周辺の村落から大量の農産物が集積され、その他の物資の取り引きも行われている。

このため日本軍も戦略拠点として重要視し、陸軍連

絡部（以前は特務機関と称し、方面軍直轄で、民政、宣撫、治安、物資の動向などのことをしていたようだった）、憲兵分隊、診療所、軍人会館などもあり、電話もケーブル線で設置され、大都會のように活気づいていた。当時まだ「楓」の工兵連隊が移動したばかりだったので各施設が何個所かに分散していた。その物資の移動、中隊の荷物（移駐のための）の運搬、配分など毎日が使役だった。先輩の兵隊さんも毎日に到着し、中隊事務室、将校官舎、下士官室、内務班なども整備され、本格的に徐々に各々の任務に就いていた。

二月の中旬頃になり、現地召集（在留邦人）の補充兵が入隊してきて、私達、現役兵と合同で一期の教育が始まった。二月～三月にかけて各個教練の連続、毎日毎日が忙しく駆け足で飛び回り、腹がへって仕方がなかった。

そんな頃になると、一人でもモタモタした者でもいと営庭一周の早駆けや、いろんな処罰を受け、ほんとうに「きつい」教育の日々が続いた。

四月に入ると分隊の戦闘教練が始まり、地形、地物を利用しての攻撃演習である。その頃は麦の背丈も伸びて、遮蔽するには至極便利だった。また、腹を空かしている新兵にとっては助手の上等兵の目を盗み、匍匐前進を利用して野菜畑の人参、小カブなどを引き抜いて、土の付いたままよくかじったものでした。

五月になると麦の穂も出始め、演習も野菜畑、麦畑を避けて済寧飛行場跡地へと移動した。そんなある日、演習の合間の休憩時間を利用して班長の精神教育の学科の授業となった。「間もなく演習（教育）も終わり検閲が済めば、古兵と起居を共にし討伐や衛兵など与えられた勤務に就かなければならない。戦陣訓に『生きて虜囚の辱めを受けず、死して罪科の汚名を残すことなかれ』と書かれている。万が一、敵の捕虜となるようなことになったら、自殺するのだ。自殺の方法の第一は手榴弾を用い、小銃も腹に抱えて自爆するのだ。いつも手榴弾は二個持っているが一個は戦闘用に、残り一個は最期の時に使用するのだ。第二の方法は小銃の銃口を口でくわえ、靴を脱ぎ足の親指で引き

金をひく方法である。第三の兵器を持っていなかった場合は、舌をかみ切り自殺するのだ」と事細かに教えられた。

班長が教えた戦陣訓の暗唱も終わり、約十日ほど経過した五月の末頃、教育も終わりに近く小隊の戦闘教練が行われた。教官自ら指揮を執り、小隊の後方にいる砲兵の援護射撃による敵陣地の攻撃で、砲兵の援護射撃後五分以内に各分隊が敵陣に突撃できる地点まで進出する。一、二、三分隊が横一線に六、七十メートルに並び、兵は地形、地物を利用して早駆け、匍匐前進などして砲兵の援護射撃の終わるのを待って一斉に突撃し、敵陣を攻略する演習である。

この演習場所は農地と違い土地の起伏が多く、匍匐前進すると雑草の中に菓子のコンベイトーに似た草の実がいたる所があり、手のひらが痛くて悩まされ泣かされた。そんな演習なので理想通りの教練ができるわけがなく、何回も繰り返し続行された。大陸の五月の日中気温は真夏並みで、まして飛行場跡なので日陰も

なく、休憩していても汗が流れ落ちてくる。時間も昼頃となったので教官より一時間休憩、食事をするよう伝達された。「さあ大変なことになった」弁当を携行しなかったのである。皆、昼食は中隊に戻って食べるものと思っていたが命令だからどうしようもない。

午後の演習も休憩だけで開始され、約三百メートル前進突撃し、また元の地点に戻る、この繰り返し演習である。食べても食べても腹が空く若い時代、一食抜いての演習は本当につらく、くたくたになつてくる。班長や助手の上等兵もなんとか演習の成功を祈るような面持ちで新兵の後方について指導してくれていた。

教育中は怒鳴られる、けられる、殴られるは日常茶飯事だった。私は軽機の射手として十一年式軽機関銃を持って演習をしていた。そのすぐ後方には弾薬手が弾薬箱を持って続いてくるのが任務であるが、その弾薬手が現地召集の補充兵で、三十歳を過ぎ頭髪も薄くなった堀田二等兵だった。

後方から指導に当たっていたのが朝鮮から現役志願を

した下士候の上等兵で、七月になれば伍長勤務兵長に進級する優秀な助手であるが、攻撃演習の隊列から遅れがちの堀田二等兵を、手旗信号用の棒で尻や頭を打ったことでした。ようやく長かった小隊の戦闘教練も纏まり帰営した。

夜の点呼も終わり、就寝すると消灯ランプが営庭の方からなんとなく哀調を帯びて聞こえてくる。「初年兵はかわいそうだね！ また寝て泣くのかよ！」と誰がランプの音に合わせてこのような文句を作ったかは知らぬが、確かにそのように聞こえる。演習の疲れ、空腹を抱え、ベットに入れば「バタン、キュー」とすぐに死んだように眠りについてしまう。まだ寝たばかりと思っていたが……隣の戦友から「第二番立哨の不寝番の時間です。交代の準備を」と起こされた。隣の堀田二等兵も起き上がり、三八式歩兵銃に着剣し、二人で中隊事務室前まで行き、薄暗い外灯の下で上下番の引き継ぎを行い交代した。

先に堀田が「動哨に行ってくるよ」と言って炊事場、講堂の裏手を通り、教育隊、第一、第二小隊の宿

舎の見回りへと出かけ、私は中隊事務室前の外灯の下で立哨を続けた。事務室の裏手には将校と上級下士官室などがあり、十時を過ぎていたが大きな声の話し声が聞こえた。まだ幹部の人達は起きているらしい。

堀田が動哨を始めてから、もうそろそろ交代時間だなと思っていたが、堀田の姿が見えない。どうしたのか長過ぎるな、と思っていたら事務室の裏から足音が聞こえてきた。帰ってきたなと思ったら、何と教官の鹿子木少尉だった。敬礼をして「異常ありません」と報告すると「只今銃声がしなかったか？」と問われたが「知りません」と答えた。教官は懐中電灯を持って衛兵所に行き、そして営内の巡察を始めた。三十分くらいたったと思う頃「非常呼集」がかけられた。事務室前に全員が集まり各班毎に人員点呼をして週番士官に報告した。

中隊長から、堀田二等兵の不祥事の話聞かされた。皆、驚きのあまり声もなく静かに兵舎に戻っていった。私は不寝番で通常ならば一時間で交代だが、相棒が不祥事を起こし自殺して誰もが動揺してしま

い、交代の順番なども狂い、次に立哨する者が来ない。三時間ばかり過ぎてからようやく交代が来て下番することが出来た。班に帰り装具を外し床に就いたが隣の戦友は帰って来ない。内務班全員が床に入って横になっていたが自殺の驚きと悲しみで誰もが眠ってはいなかった。入隊以来何事も内務班一丸となって、お互いに真の兄弟以上にやってきたのだが、どうして？など、反省、思いをめぐらし、皆朝まで寝つけなかった。

翌朝、起床ラップで起こされてみたものの、皆、うち沈んで班内の出入り時の報告も、小さな、悲しみとも思える声となっていました。班の戦友からの話によると、先日の演習の休憩時間に教わった自殺法で、隣の兵站病院の便所で一服のたばこをすった後、銃口を口にくわえ、足の親指で引き金を引き覚悟の自殺をしたとのことだった。

その日の演習は取り止め、堀田二等兵について、その他一般の演習、内務班の教育など、気付いた諸々のことを、無記名で書き提出するよう命じられた。私は

「間もなく一期の教育が終わろうとしている時、不寝番として十分な勤務ができなかったことをわび、五カ月間も起居を共にして指導していただいた先輩にも、申し訳ない」と書き添えた。

亡き堀田二等兵は射撃の名手で、また多趣多芸で、初年兵同士では一番の人気者だった。一期の教育でも終われば現地で板前をしていた腕を買われ、間違いない炊事に抜擢され、「腹いっぱいというまいとろが食いてえなあ」と戦友からうらやましがられていたのに、なぜ急に自殺したのだろう。そして新兵には一発の実弾も渡されていなかった、どうして入手出来たのか？自殺の原因は、堀田二等兵の人種差別の考えによるものと思えた。

朝鮮人に殴られた！ このことのようにだった。上衣のポケットから紙切れに「岩本上等兵を恨む」と走り書きの遺書めいたものがあったとの話。このような不祥事があったため、岩本上等兵は下士候を取り消されてしまった。

堀田の遺体は遺骨は、どうなったか分からなかった。茶毘に付した兵隊の話を書くこともなかった。後日になって聞いたところによると、ひっそりと城内で茶毘に付され、事故死として黒布で覆われ、どこか軍の監理している寺院に納められたとか、定かではない。

復員後、平和になって昭和三十年頃の映画で五味川純平の「人間の条件」を見た。小銃の銃口をくわえ自殺するシーンがあったが、堀田二等兵と全く同じだったと思えた。

私の戦友だけでなく、反戦思想、勤務のきびしさ、私的制裁などから、他にも同様の人がいたのだ……と、つくづく戦争、軍国主義の恐ろしさを改めて知った。

検閲の失敗

正確な日時は忘れましたが、昭和十九年六月十日頃だったように記憶しているが、済寧の中隊で、夕食を済ませたのち、兗州の大隊本部で一期の検閲を受ける

ために、教官、助教、助手の十三人と新兵約六十人の完全軍装の一個小隊編成で出発した。いくら治安が良いと言っても敵地の中、約三〇キロの夜行軍、戦闘経験のない者が主力だったので不安だった。

所々に点在する部落の付近を通る時など、犬が一斉にほえ出し、前方の部落では火の手が上がる。討伐間では良く見かけることで何かの合図（のろし）だとのことだった。夜間の命令（号令も）の伝達や話し声なども低音でするように教育されていた。暗闇の中の行軍なので、隊列から離されまいと睡魔と戦いながら前を歩いている戦友に必死になってついて行く。突然、頭上を「ビューン」と音をたてて小銃弾が飛んで行き、「アッ！」と、つい本能的に頭を下げてしまった。なんとも不気味である。古年兵は何度も戦闘経験があるから、「こんな弾丸の音では遠く離れているから怖くはないよ」と至って平常心だった。約四、五十分歩いたと思う頃、安全な地形（見通しのきいた遮蔽物のある場所）を選んで休憩をする。

初めて実弾、手榴弾を携行しての夜行軍、不安と怖

さはあったが、六月とはいえ、夜間の大陸特有の気温の低下、しかし当時は若く張り切っていたので、さほど苦痛には思えなかった。兗州に近づくと頃には白々と夜が明けはじめる。

目的地の兗州の部隊本部も間近に見えてきたので「ほっ」として元気が出てきた（周田が良く見えてきて、安心感がわいてくるのである）。

営門前に近づくと鹿子木教官が抜刀して指揮を執り、「歩調をとれ！」の号令で三個分隊が整然と隊伍を組んで堂々と大地を踏む靴音も高らかに行進する。歩哨の「整列！」の掛け声に衛兵は整列のうえ「捧げ銃！」の部隊に対する敬礼を行い私達の小隊は進んで行く。新兵が主力であっても指揮者により、このような敬礼を受けるものかと、初めて知った（軍装した部隊への敬礼など教えられたはずだったが）。

中隊の兵舎とは違い、元「楓第三十二師団」が駐留し砲兵連隊もいた所で、営庭も広く兵舎も立派なものだった。営庭で小休止をしながら朝食をとり、二時間ばかり経過してから、いよいよ検閲が始まった。高橋

少佐（第百九十二大隊長）を先頭に副官、各中隊長もこれに従う。型通りの鹿子木教育隊の閲兵、続いて軍装検査、携行品、兵器弾薬、被服の検査をする。引き続いて二キロばかり離れた演習場に行き、分隊の戦闘教練が開始された。戦闘教練には最適な地形であり、起伏が多く、立木、障害物等が散在している。

教育隊は小銃、軽機、擲弾筒の三個班に分かれ教育されてきた。私は軽機閲銃の射手、補充兵の平田二等兵を弾薬手として小銃班に加わり、分隊の戦闘教練の検閲を受けることとなった。第一分隊長の神田福史伍長の状況説明により「前方三百メートルの敵陣地を攻略すべし」「散れ！」の号令で軽機を中心にして左右一線に散開した。

いよいよ戦闘開始、前方の敵陣からは盛んな攻撃がある。まず、先頭に地形地物を利用してながら軽機（十一年式軽機、重くて脚がグラグラして邪魔になる）を抱え、早駆けで姿勢を低く保ち身を遮蔽して攻撃を始めた。軽機の射撃には通常「タッタッタッ」と三発点射が一番の効果が上がり、一個所で二、三回の射撃

をするよう教育されてきた。敵からはこの軽機が一番狙われやすいため、素早く位置を変え進撃するのであるが、地形、地物を利用し、軽機を据え付け、照準を合わせ引き金をひいたが単発、何度繰り返しても小銃と同じ単発である。

まず後方で指揮をとっている分隊長に「軽機故障！軽機故障！」と叫びながら前方にも対応していた。私は軽機班で誰よりも軽機の扱い方には自信を持っていた。分解、組み立ては目隠ししてでも出来るようになっていた。槓杆をひき、薬室を見て、よくある「突っ込み」かと点検したが異常なし。一度に三十発装填できる装填架も点検、また規整子も調べ、最高ガス圧が入るように二十四に調整したがどうしても単発しか出ないありさまに、指揮をとっていた分隊長も「軽機どうした！軽機どうした！」と怒鳴っている。戦闘はますます激しくなってきた。敵は重機関銃で攻撃をしかけてくる。本当の戦闘だったとしても戦にはならないが、演習のため状況の設定どおり、攻撃を続けることが出来た。検閲官もこの軽機の単発には一斉に

注目していた。私も軽機の教育が始まって以来この軽機を担ぎまわり、手入れも他の者に任せず、私物同然のように大切にしてきた。

その結果、今日の晴れ舞台でこの始末、どうして、何で、悔しくて泣きだしたかった。しかしこれまで頑張ってきたのだからと、最後まで投げ出してなるものかと心を奮い立たせ、突撃も間近な敵陣近くまで前進していた。約三十分の演習だが、検閲官が馬で走ってきて馬から飛び降り「軽機どうした！」と大声をかけたが私に近づいて右側に腰を屈め「まず規整子を二十回、回して」と声をかける。「はい！」と答え軽機の左下から規整子を点検し「はい！二十四になっております」と答え、装填架も入れ替えさせたが直らない。

「弾薬手、前へ！」と呼び寄せ、修理工具を取り出し薬きょうの突っ込みをアレコレと設定、故障の修理を私に試みさせた。どの故障も素早く完全に修理することが出来た。

後方から、突撃ラッパが鳴り始めた。第一分隊の新

兵は一斉に立ち上がり、そろって突撃を敢行した。第一の目的陣地を攻略、分隊長から「成功！」と号令があり、新兵は号令によって素早く地形地物を利用し、いっどこから来るか分からぬ敵の逆襲に備えて伏せ、油断せず前方左右に気を配っていた。その通り左前方から敵の援軍と第一陣地から後退した敵とが合流し、体制を整え、逆襲となつて突撃して来た。私は誰よりも早くその状況を発見し、分隊長に大声で報告しながら立ち上がり、軽機の腰だめ射撃を行った（装填してある三〇発を突撃してくる敵に一斉に浴びせかけるのが、軽機の一番の使命であり、威力が発揮できるのである）。それがなんと、たった一発しか発射できなかった。

敵味方そろつて突撃を敢行し分隊の戦闘教練の検閲は終了した。そして分隊長から「軽機はどうしたんだ！ 単発ではどうにも状況が盛り上がらないよ」とつぶやかれた。三カ月間一生懸命教えていただき、また勉強もしてきた心づもりだったが、このような結果

として現れてしまった。口惜しいやら残念やら、昨晚、徹夜行軍し頑張つて来たことも、がっかりして、疲れが一度にどつと出てしまった。

熱心に手取り足取り教育してくれた班付上等兵の前に行き「申し訳ありません」と深く頭を下げおわびした。その上等兵はとうに気付いていて「大野！ 昨晚の夜行軍の時は実弾を持っていたのだよ。今のは演習なんだ、空砲なんだよ！」実砲銃身と空砲銃身を取り換えずに演習に出てしまったのだ。

十一年式軽機関銃は、発射による火薬ガスの一部を利用して、滑塞を前、後進させて連続発射できるようになっている。昨夜の分隊編成から私は軽機射手、平田二等兵が弾薬手として第一分隊に入り行動してきた。第一分隊は小銃班、第二分隊は軽機班なので誰かが空砲銃身を背のうに付けて背負つた兵が二人いたはずだが「検閲」という緊張に加え、昨晚の夜行軍の疲れなどもあって、一、二分隊の連絡もおろそかになり、そのまま取り換えなかった結果である。

続いて二、三分隊とも相次いで検閲を終わり、午後

から大隊本部の営庭において第四中隊、初年兵の検閲結果の講評が開始され、高橋大隊長がメモを書いた陸軍野紙を持って一メートルくらい高い壇上に登った。まず第一分隊からはじまった。

「第一分隊、軽機関銃射手、陸軍二等兵、大野政勝の軽機関銃の操作、地形、地物を利用しての攻撃は正確、迅速にして実に見事であり、他の模範とかべく、また敵逆襲に対しては独断、適格なる判断により、速やかに立ち上がり、腰だめ射撃を行い、敵の突撃を食い止めたことは立派であった……」

と隊長より有り難い賞詞をいただいた。終わりに「誰、彼に関係なく、軽機関銃の具合が良くなかったが、大切な兵器なるがゆえ、全員で良く手入れを怠らぬように」と軽く申し添えられた。

銃身の取り換えを間違えたことを知って知らずか、分からなかったのか、恩情あるお言葉に思えた。

この有り難いお褒めの言葉は私個人ではなく、ちょっとした失敗の戒めをそれとなく教官、助教、助手、以下責任追及するよりも、より一層の団結を計り、強固

な第四中隊になってくれるようにとの、お訓しの言葉と受けとめ、ほんとうに有り難かった。

この講評の原稿は乗馬で検閲に当たった大隊副官の起草されたものと推測でき、一言お礼を申し上げたいと思ひ、戦後も探しておりましたところ、I副官にお逢いすることが出来ました。五十年前の検閲の模様を語り、厚くお礼を申し上げたところ「軍隊は運隊と語りからね！ 運が良かったのだよ！」と何の恩着せがましいことも言われず、「お互いに元気で長生きしましょうよ」と話されお別れました。